# アール・ブリュット検討部会報告

# 1　アール・ブリュット振興の検討について

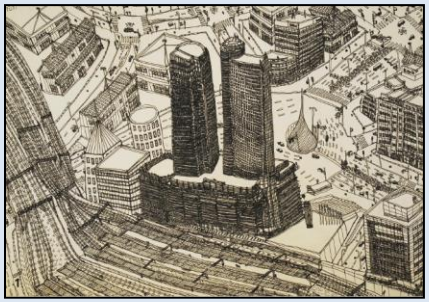
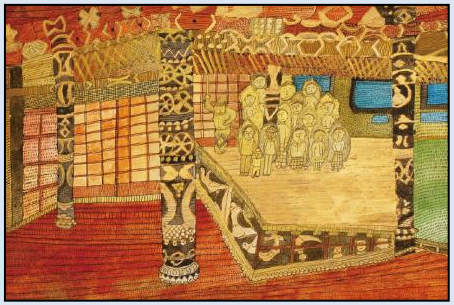
## （１）背景

アール・ブリュット(※１)の普及啓発を通じて、年齢や障がいの有無、国籍や文化の違いなどに関わらず互いの価値観を尊重しあうダイバーシティの推進と、あらゆる人が芸術文化を享受できる社会基盤の構築に繋げていく。

**(※1) アール・ブリュットとは**

- フランスの画家ジャン・デュビュッフェ（Jean Dubuffet 1901-1985）によって考案された言葉で、一般的に**「生（き）の芸術」**と訳されている。
- 大学等における美術の専門教育を受けていない人が、**自身の内側からあふれる衝動を、独自の発想と方法で表現した作品**の名称。
- 主に知的障がい者や精神障がい者等による作品が多いことから、日本では障がい者アートとして認識される風潮があるが**障がい者の作品に限ったものではなく、幅広い作家が担い手**として存在する。

**【作品例】**

## （２）　アール・ブリュット検討部会（芸術文化評議会専門部会）における検討

平成27年11月から平成28年11月にかけて、主に以下の事項について検討し、報告書をとりまとめ。

**① 展示・制作・交流のための拠点形成**
**② 才能の発掘のための場や機会の創出**
**③ 社会にアール・ブリュットを定着させる普及啓発施策**

※検討においては、アール・ブリュットに係る基礎調査結果や、調査を兼ねた展示イベントの実施結果を活用

# 2　アール・ブリュット検討部会　報告書概要

## 第１章　アール・ブリュットが持つ魅力

**1　作品が発する力**

○　アール・ブリュットには、観た人に対してこれまでにない、「何か」を感じさせる魅力を持っている

○　作り手の心の奥底に触れて、人間の本質を考えるきっかけとなるなど、作品の奥深さに多くの人が魅力を感じる

**2　人と人を繋ぐプラットフォーム**

○　アール・ブリュットは、共感者を生み、人を引き寄せ、さらに普及活動へと繋がるサイクルを生み出している

○　美術、福祉、医療、教育、まちづくりなど多様な分野の人々を結びつけるプラットフォーム機能を持っている

## 第２章　アール・ブリュットが都民や社会にもたらすこと（振興の意義）

**1　ダイバーシティの理解促進**

○　様々な背景を持つ作家や作品の生まれた背景を知ることを通じて、いろいろな生き方、人間の多様性について理解を深めることができる

○　多様な価値観や能力などが尊重されるダイバーシティの理解が浸透した社会の構築にあたっては、アール・ブリュットが大きなきっかけとして、有効な役割を果たしていく

**2　社会的包容力のある社会の実現**

○　アール・ブリュットをプラットフォームにして生まれる様々な出会いやアクションが、人々の意識や価値観を変えるきっかけとなり、社会そのものの変革に繋がっていく可能性がある

○　一人ひとりの個性を大切にし、包容力のある共生社会を築いていくためにも、アール・ブリュットの持つ「つなぐ」力が、大きく貢献していく

## 第３章　アール・ブリュットを取り巻く現状・各種調査結果

**1　アール・ブリュット認知度調査**
⇒　都における認知度5.4%。滋賀県では12.7%で、行政の広報や取組が影響

**2　国内外の展示に係る調査**
⇒　アール・ブリュット ジャポネ展の国内巡回展以降大幅に増加。国外でも開催回数は増加傾向

**3　都内における作品制作に係る調査**
⇒　制作は福祉施設等の日常活動の一環。情報提供や交流機会を求める声が多い

**4　各種機関による普及啓発取組調査**
⇒　作品展示等については各地で行われているが、制作の現場とつながる取組は少ない

**5　アール・ブリュット展示の結果報告**
⇒　高い満足度・再訪性があり、認知度が低い若い世代への普及啓発が重要

## 第４章　都が取り組むべきこと

**1　施策の方向性**

(1)　展示の拠点整備
⇒　現トーキョーワンダーサイト渋谷を活用し、整備を着実に進める

(2)　普及啓発施策
⇒　多くの人が作品に触れる機会を増やすとともに、プラットフォーム機能を活かした取組を推進

(3)　制作現場との繋がる取組、新たな作家の発掘
⇒　施設への情報提供、新たな作家の発掘に繋がる作品発表の機会を設定

**2　方向性に基づいた具体的な取組の実現に向けて**

(1)　東京都現代美術館の機能活用
⇒　新進・若手芸術家の発掘・育成に関するノウハウや国際的なネットワークを活用

(2)　専門組織の設置
⇒　展示や普及事業、新たな作家発掘に向けたリサーチなどの業務を担う専門の組織体制が必要
より専門性を高めていくため福祉施設や教育機関等との関係構築、助言機関設置等

## 第５章　今後に向けて

都が推進するアートプロジェクト「TURN」との連携を図るなど、2020年大会を契機とした取組を進める